

「消防団員の活性化について」

公益財団法人 長野県消防協会 参与 五十嵐幸男

岡山県の講演は3回目になります。楽しみにしてきました。全国消防操法大会が長野県で開催となり、てっきり岡山県が優勝すると思っていましたが、準優勝おめでとうございます。強い県というのは、大変な苦勞があったと思います。

また、女性団員がこれだけ大勢いて活性化大会を開催したことは女性のパワーにかわるんではないかと思います。

平成2年に上田市、ポンプ車の部、初出場で初優勝、それから団長を拝命させていただくんですが、1勝5敗、1回優勝させていただくんですが、あとは準優勝でおわっています。晴れの舞台にでれることが最高でした。いかにがんばってやることが大変なことか。欲が沸いてくるといやになってきて、県大会で勝てなくなる。大事なことは操法に勝つことよりも操法を通じて消防団員としての基本的な操法を習うことが必要です。

また、こここのところ女性団員の活躍がすばらしい。私が団長になるときに、女性団員を初めて採用したのですが、もう25,6年前になりますが。それから活動の仕方も活躍の仕方も変わってきている。

初めて全国活性化大会を開催したのが静岡県沼津市でした。沼津市の団長さん、女性団員を採用したけど、どういう活動をするかわからないということだった。その中で、県の女性団員がどんな活動をするのか勉強にして参考にしたいということで始まった。この時、私は副団長だった。女性団員をと思いましたが、副団長だと決定権がない。いい話になっただけだった。年が変わって、私は団長に就任した。すぐ沼津に電話して活性化大会、分科会、交流会と沼津まで、音楽隊を含め女性団員が応援にいった。

いづれにしても女性団員がいろんな皆さんとふれあい、交流することによって、男性団員がどんどん減ってはいるけど女性団員はどんどん増えている。活動、活躍の場もどんどん増えている。岡山県の皆さんもかなり頑張っていると思いますが、いかに地域に密着した消防団のあり方をいわれているのではないかと思います。

毎年、日本消防協会で行われています幹部候補研修、各県で2,3名参加して

います。全国の皆さんと交流し、勉強して、自分の団へ帰って参考にする。やはり、全国区の皆さんとお話しができることで、いい機会だと思っています。基本的に消防団の活動はどのようなことか。地域運動です。自分の住んでいる町が、いかに好きかが原点です。そこで活動する、子どもを育てる、年寄りをみる、自分たちが育つ、一番大事な場所が地域なのです。自分たちの地域にあった活動、この町を大事にしようといういうことを考える。

上田市、100人に1人が消防団員、分団数が17、多いところで110名、少ないところで30名、全国大会へ出場して優勝した分団は、たった30名、今までは、操法は下手で相手にされなかった。それがなぜ優勝できたか、新聞作ったり、火消し太鼓作ったり、文化講演会もやったりもした。目立てば目立つほど、他の分団からブーイング。「操法勝てないからそんなことやって格好つけている」そんなことまで言われ、それを聞いた団員が「分団長、おもしろくねえ、操法、勝てたら文句いわれねえな」と1年発起してみんな頑張った。初めて、私が分団長の時に上田市の大会で3位に、私の後輩が頑張ってくれて上田の大会で勝てるようになった。それで県大会の時に初めて優勝した。そして全国大会。その時に思ったのは、操法に勝つだけでなく、家族との絆、地域との絆、そういうものが支えてくれた。操法そのものも大事だけれど地域活動が一番大事です。

また、全国どこにいても共通の言葉がある。「消防団員のなりてがない。」

私は子どもが3人います。上は大学を卒業して、真ん中の娘は短大を卒業して、保育士になり、女性団員としても頑張ってくれた。下は12歳離れてでき、消防団員に入れた。いったんは入ったがぜんぜんやらない。私をみて反面教師です。お金ももらわないで、もっと好きなことがしたいと。ここにいる皆さんは相当おかしいんです。わかりますか。平気でやってんです。一般の人はやりたがらない。だからなりてがない。戦後の皆さんはだまって入るものだと。このおかしい人たちが日本、地域を支えている。本当に大変なことだし、素晴らしいこと。だからもっと消防団員としての自覚、自負を持ってもらって身を挺して、地域のために頑張る、そんな素晴らしい構え方をもつ人たちはいない。そういう中で、おれたちはとんでもないことをやってんだとそういうプライドをもたないといけない。火事が少ない、近所のために必要とされる消防団であると。

発想の転換として、「どうしたら消防団員になれるか」を。

まず団員の勧誘に行きます。名前だけでといっても入ってくれない。そうでなくて、お母さんに話しかけるのに「お宅のお嬢さんあるいは息子さん、近所で大変評判がいい、ぜひ会わせてもらいたい。」「評判がいいからぜひ消防団員に入っても

らいたい。」という言い方をする。親は自分の子どもを褒められたら悪い気はしない。それで合わせてもらえる。一生懸命やってきた消防団員の息子なら親は入れる、そうでないといれたがらない。

「私たちの消防団活動は、きちんとやらないといけないから評判のいい仲間ではないと困るんだ、だから一緒に入って頑張ってもらいたい」という口説き方をする。1回でだめでも何回か行っているうちにその気になる。

熱意と誠意を持って口説くこと、あと自分たちの消防団活動に自信をもっていること、だから操法で勝つということも証なんです。県全体がそういうレベルであるということ。上田の大会で勝つことが大変だった。負けると悔しくて団員は泣いている。だけど17の分団のうち全部が泣いているとおっかないです。だけど全然、関心を持たない分団もあるんです。いいんです。ただ自分たちの分団の良さを理解していれば、ある団員100名の分団、操法でるだけ、勝たない。その分団長、100名を前にして80名は勤め人、消防団活動は年に3回でいい。春秋の巡視、年末夜警、出初め式、これだけ。3回に少なくても85人、多くて95人がでる。これが取り柄の分団。操法はやりたがらない。それで上田の大会に出るときに今までは班の中でやって勝ったところをだすのだけど、もともとなまくらな分団なんで本気で練習しない。そこで一番弱いチームをだす、そしたらでたくないから頑張る、そしたら操法も覚えるし、勝つんです。そしたら逆転の発想です。上田の大会にきて勝ったことがないのに勝つようになった。1回勝つ、2回勝つとおもしろくなる。自分たちの分団の仲間意識に目覚めた。もう一つおもしろい分団がある。宴会、余興大好き、操法には来ない、だけど取り柄は返事、返事だけは1番いい。「おまえの分団、取り柄はないけど返事だけは立派だ」とみんなの前で褒めてやるとだんだんその気になってきて、その他の分団も返事だけで褒められるとまねをするんです。それから操法にも真剣になる。色々な分団があっていい。負けたくないからはりあう。

また、団長になりたくない、分団長になりたくない、それだけ魅力のない消防団だといけない。思ったことが実行できるのは、トップでないとできない。長野県の消防協会長は2年と決まっている。55歳で定年もあり、もっとやりたかったけど、団長の任期を決めたときに何を基準にしているか。2年とか4年とかの区切りでなくて、自分がトップになったときに、どんな仕事をするか、したいかが1つの区切りだと思っている。私は団長あるいは分団長を拝命したときに、こういう分団、団にしたい、その結果が任期だと思う。いかにトップが人からみて羨ましがられるかだと思う。だから団長に分団長になりたくない消防団はだめです。目標としてもらいた

い。団長はカッコいいです。市議員は沢山いるけど、団長は一人だけ。上にたつと苦労も多い。お袋がよく応援してくれた。

一つだけ言えるのは、一生懸命、自分のために、地域のためにやること、悔いの残らない消防団活動をしてください。思い出話はたくさんある。お酒には飲まれないように。特に幹部は、下はいい、どんなに飲まれていても。酒は相手の本音を引き出す手段。酒を飲むと大概、本当のことをいう。

また、大事なことは、下の団員の時は話し上手に、自分の気持ちをちゃんと伝えられること。上になると聞き上手に、いかに相手の目を見て聞いてやれるか、自分の話を聞いてもらえるとその人を信頼する、それが実行できるといい。団長になると孤独ですよ。常に皆さんに感謝しないといけないし。

女性団員についても最初、大事にして失敗しました。女性団員を採用して、女性だから危険なことはさせない、予防広報活動、女性団員も現場にでないとだめ、本当の怖さがわかる、災害現場に行ってはじめて、何の為に予防広報をしているか、こうなるとはいけないために施策を考える、だから子どもに対してもよくないことをやって見せる、本当にそんなふうになつてはいけない、危険な目に遭わせたくないから、独居老人のところに行っても、お年寄りにも危険な目に遭わせたくないから、災害現場にでてみないとだめ、あまりにも女性団員を大事にしすぎて。大事なことは女性の持っている細やかな視点、男には持ってない消防団活動をどうしたらいいかが大きな役割となる。

話はずきませんが、ここでDVDをご覧ください。

※五十嵐幸男講師の講演の一部を掲載しました。